

# 史遊サロン通信

No. 269号  
平成31年  
3月5日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

## 五月の史遊サロンが最終回となります

二月末になって五月の会場予約をしようとして「ルノール会議室」にアクセスして驚いた。五月の予約欄が全て「休館日」となっているのである。

五月の史遊サロンを予定通り第三土曜日の五月十八日に行います。会場は定例の銀座ルノール八重洲北口会議室で三時開始です。当初からの心積もりとして三年から四年間つづけたいと思っていました。丁度五月で手持ち資金残高も底をつく予定です。「史遊サロン通信」も五月で最終回となりますので、ふるってご投稿下さい。

なお、五月号は長期連休のため郵送に遅れが出るかも知れません。

実は手持ち資金残高から判断すると、五月の「史遊サロン」が最終回となりそうなのである。そのためだけに、どこか会場を探さねばならないと云うのは何とも気が重いところ。その後ルノール側に問い合わせたところ、値上げ後の予約欄が別にあることが判かり無事に予約できた。一件落着である。

こんな小さなトラブルがあったので、ついでに史遊サロンの今年五月時点での経費実績(予定)を別表に報告しておきたい。

まず平成二十七年初に旧幹事から引継いだ現金が六十九万円である。その内から「史遊会通信・第11集」の印刷・製本・配布の費用五万円を除くと実質的には六十四万円を引継いだ。随分残っていたものだと思う。それは、事務を専任して下さっていた下山田允子さんが病の

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の三月十六日、定例の銀座ルノール八重洲北口会議室で行いますが、会場の都合で開始が三時半となっております。ご注意ください。

ため平成二十五年六月から業務をはずれ、その業務を私と幹事で引き受けたことにより月々の出金が二万円弱ほど減少したことが主因である。推算して見ると二年間半で五十万円ほどになる。

新しく史遊サロン体制になってからの経費を実績(予想)で見ると、基礎的な活動費としては、通信の印刷費が三万円、発送費が十万円、会場費が十八万円、合計三十一万円、隔月当たりになると一万五千円ほどで、たいして大きな金額ではない。

最も多く支出したのは八件に上る出版奨励金の三十一万円である。

もともと史遊会は、別に本業を持ち歴史に関する著書を持つ仲間の会であった。史遊会の後始末(っ)を引き受けた時、まず考えたことはそのことであつた。ちよつと手を加えれば本になる原稿をお持ちの方が会員の中にかなり居る。折角なのでそれをちよつと後押しして見たい。

史遊サロンの支出実績 (2016.1初～2019.5末)

サロン参加者数・頁数

支出項目	金額(円)	実績単価	年月	サロン参加者数	サロンの通信頁数
2016年2月24日 旧幹事より引継いだ金額	689,000		2016 3	19	12
史遊会通信合本 第11集制作費(送料含) 旧史遊会分	52,490		5	12	14
旧史遊会からの実質引継ぎ金額	636,410		7	13	10
史遊サロン発行(250号～270号) 合計	123,159	6160円/号	9	12	6
内訳 封筒代 (9,542)			11	14	12
内訳 切手代 (74,682)			2017 1	14	14
内訳 事務用品 (13,964)			3	12	12
内訳 北印刷費 (24,971)			5	9	8
史遊サロン会場費(20回分)	182,400	9,120円/回	7	10	12
出版奨励補助金(8件)	310,794	38,850円/件	9	14	4
鯨游海『漢詩の流れ・潮騒録』 A6版 214頁			11	14	10
千坂精一『関東管領始末記』 A6版 202頁			2018 1	14	12
太田静一『誠忠の茶園』 A6版 222頁			3	12	6
平山善之『歴史の散歩道』 A6版 206頁			5	15	12
諸橋奏『クレオールのたわごと』 A6版 172頁			7	11	12
佐藤健一『和算における日用数学』 A4版 282頁			9	11	12
村上邦治『千家尊福伝』 A6版 220頁			11	13	10
新井宏『狩谷被齊讃歌』 A4版 50頁			2019 1	12	10
史遊会HP掲載費(平成28年～31年)	9,600	2,400円/年	3		6
2019年5月末基準の支出金額合計	625,953		平均	12.8	10.2
2019年5月末の残高	10,557				

それが八件の出版にながった。もちろんこの期間にも、プロ級の会員三名の方が別にすばらしい本を造っている。合計すれば十名以上の方が本を出したことになる。たいたいものである。

出版奨励金の額については、会員歴の長さ、頁数、部数などを考慮して多少の差をつけたが平均すると四万円弱である。

その他に史遊会通信と史遊サロン通信のホームページ掲載料が四年間で一万円。したがって今年の五月で残高が一万円になる。

以上で会計報告に代えるが、五月末の残高一万円の使用方法としては「史遊サロン通信第12集」を作成し国会図書館に送ることを考えている。

さあ、これでお預かりした六十四万円を無事に遣いやる事ができそうである。

この間「世話人」と称して「ひとり幹事専決」で、勝手に運営してきた。これを二三人の幹事で分担していたら、かえって手数が少なかったであろう。

「ひとり幹事専決」がいつも良いわけではないが私には史遊会で実質的に「ひとり幹事」を五年間ほど努めた経験があった。

その辺の事を含めて、四十年近くの「史遊会」の歴史を紹介して置きたい。

四十年間も続いた「史遊会」と云えば、比肩し得る同種の団体はほとんど無い。しかし当然のことであるが、その陰では何回か「解散」の危機があった。その歴史を知っていて、私は「史遊サロン」の世話人を引受けたのである。

設立は昭和五十七年二月、当初のメンバーは七名の侍であった。今でも毎回史遊サロンに欠かさず参加して下さる千坂誠一さんはその中에서도今も活躍の唯一人のメンバーである。

発足間もなくの昭和五十八年からは『史遊』という会誌を季刊として発行。八年後の平成二年には『だから歴史は面白い』を出版している。その際の執筆者は二十一名、会の興隆期であった。

私が入会したのはその後間もなくの平成四年十月である。『史遊』四十二号に早速原稿を載せているが、その頃から会は息切れしたらしく『史遊』は平成五年七月、四十三号で終刊となり休会となった。これが第一回目の危機。

詳しい事情は知らないが、多士済々、会員間の意見の相違によって幹事さんたちが会の運営に苦慮したらしい。

再出発するのが平成六年一月であるが、四名ほどの会員が退会している。巧みにメンバーの整理をしたらしい。その時から今に続く『史遊会通信』が始まった。

それから二年後の平成八年一月、突然であったが、従来の幹事は全て引退するからと、三戸岡さん、相原さんと私が突如として運営幹事に指名された。思うに初期からの幹部会員は十数年の間に、大部分が運営幹事を務めていて、幹事の交替が出来なくなり、その上実質的な活動が低調になり、組織が動脈硬化しているとの認識で幹事が疲労困憊していたらしい。その突破口を「若手会員」に求めたのであろう。これが第二回目の危機であった。

「若手」として指名されたメンバーから見ると、実務的に下働きの出来そうなのは私だけである。とは云っても五十代後半のサラリーマンとしては最も忙しい時期であった。あまり先輩

達や周囲を気にせず、とにかく省力型で運営しよう。それは全て「ひとり幹事」として「独裁」することであると考えた。

下り坂の会の運営であった。とにかく、省力型で運営して、もし例会の出席者が五人以下になつたら伝統ある史遊会であっても、躊躇なく終了させよう。

しかし不思議なものである。ある時期から出席者が増え始めたのである。

それは会員資格を緩めて、「歴史に関する著書」を持たなくとも、同等なキャリアーさえあれば入会できるように勝手に運営を変えたことであつたと思う。これで入会希望の意思さえあれば入って頂ける。鯨游海さん等の人脈が大挙して参加して下さった。

そうなると、「ひとり幹事」の運営は逆に批判の対象となる。折から平成十三年、私は会社を卒業して、韓国の国立慶尚大学に行くことになった。もし後任が見つからなければ、韓国に行つても「ひとり幹事」を続けるつもりであったが、有り難いことに鯨游海さんが後を引き受けて下さった。そして第二の盛況期を迎える。

しかし、その時から始まった幹事の任期制・輪番制は小さな組織にあつては幹事交替期に行き詰まる。二、三名の幹事で任期を二年として

も、四年間で五名、八年間で十名の幹事を必要とする。

そんな環境の中で、平成二十五年、下山田さんが病のため事務担当ができなくなった。やむを得ないので史遊会を解散しようとする意見が大半であつた。これが三回目の危機であつた。

しかし、事務だけの問題であれば下山田さんの替りにアルバイトかボランティアを見つければ良いではないか。それなら二・三年間、私が下山田さんの事務を引受けよう。

ところが遂にその二年半後には、次の幹事の引き受け手が居なくなつてしまった。これが第四回目の危機である。

最初は事務だけ引受けていたが、「ひとり幹事専決方式」ならそれほど手数は変わるまい。後始末ができるのは私しか居ない。そして「史遊サロン」体制を始めた。

その時に心に決めたのは、「会費なし・執筆義務なし、出席義務なし・講演義務なし」の原則であつた。

何の規律もなく本当に続けることができるか不安もあつたが、有り難いことに「通信」への投稿も多く、頁数も平均十頁、例会出席者も平均十三名と従前と変わらない。しまりのない会合になるかと心配したが、座談形式の方がかえ

って参加者が自由に発言しやすく、時間が来て  
も中々「終わり」に出来ないほどであった。

更に付け加えれば、旧「友の会会員」の方々に「史遊サロン通信」をお送りし続けたが、唯  
のお一人からも「困る」との反応は無かった。

もちろん「通信」は執筆者なしには成り立た  
ないが、それにも増して「読者」なくしては成  
り立たない。質の高い「友の会会員」を引継い  
だことが大きな幸せであった。

したがって、あるいは「会費を有料」として  
も更に続けたいとのご意見もあるかも知れな  
い。

今後の方針について、触れておきたい。

僅かながらも資金を残して終りにするのは、

「史遊サロン通信」の発行やそのインターネッ  
ト上への掲載だけならほとんど費用が発生しな  
いので、消息や原稿などをお送り下されれば「史  
遊サロン通信」の発行を続けようと思っ  
ているからである。それをきっかけとして会合後の  
「天狗酒場」も時折開けるかも知れない。

組織にとって継続することは大きな要件であ  
るが、余韻を持って自然に消滅するのも美学で  
ある。

「史遊サロン通信」の五月号が最終号とな  
る。折角の機会なので、過去を懐かしむ寄稿も  
大歓迎である。それとともに「歴史に遊ぶ」寄  
稿が沢山寄せられることを期待している。

### 「合意なし」の米朝首脳会談

二月二十八日ハノイで開かれた第二回の米朝  
首脳会談は「合意なし」で終わった。

米国(トランプ)も北朝鮮(金正恩)も内心では  
何とか前に進みたかった。

しかし「完全検証可能、不可逆的な非核化」  
を要求する米国に対し、最終目標としては合意  
できても、「見返りを得ながら段階的に進めるし  
か方法のない」金正恩が妥協するはずがない。  
唯一の方法は両首脳が、相互の「虚偽の合意」  
を黙認することである。

「文禄・慶長の役」の後、幕府も李朝も内心  
では両国間の和平回復を強く望んでいたが「建  
前」が大きく立ち上がり膠着状態となってい  
た。その中で両国間外交で生業を立てていた対  
馬藩が窮余の策として「国書偽造」を謀った。  
おそらく幕府も李朝も薄々は「偽造」を知って  
いたに違いないが、己酉約条を締結する。

今回は韓国の文在寅が「偽造」を主導した。  
トランプも金正恩も仲人口の「偽造」を承知し

ていながら、だまされた振りをして「虚偽の合  
意」をするつもりであった。

しかしトランプは開かれた国・米国の大統領  
である。いくら権限を持っていても限界があ  
る。まして米国の専門家達は「騙されるな」と  
大合唱している。一方の金正恩も強硬な軍部を  
かなり粛清したとは言え、これ以上譲ることは  
身の危険も覚悟しなければならぬ。

さて、今回の会談の成績表が出揃った。大ま  
かに云えば、トランプも金正恩も傷ついたが、  
「悪い取引」をせず「ノー取引」に終えたこと  
で、次への余地を残した。その中で韓国の文在  
寅だけが「敗者」となった。

そもそも仲裁者は清水次郎長のように「その  
喧嘩、オレが預かる」と言えるほど両側に睨み  
が効き、時には自らの負担で纏め上げる力が必  
要だ。うまく行ってもうまく行かなくとも、弱  
い仲裁者は必ず両側からむしられるのが宿命で  
ある。

韓国内政・外交のあらゆる面で「総敗北」  
を味わっている文在寅は、米朝会談にオールイ  
ンして何とか支持率を確保したかっただけにダ  
メージが大きい。

歴史に学ばず、朱子学的な原理主義(理想主  
義)にしがみつく文在寅も、この辺で変わらざ  
るを得ないであろう。

## 出雲大社再考 (二二三)

## 神仏習合期の混乱 (2)

## 僧侶にひれ伏した神官

## 村上邦治

大社の別当寺は天台宗鰐淵寺に決まった。別当寺が大社に派遣した僧侶が、神社の運営管理・祭祀行事に目を光らせた。そればかりでなく権力を利用して、大社の年間祭祀行事に介入し、仏教行事を組み込ませた。

中世大社年中行事一覧をみると、鰐淵寺僧護摩供が一月一日から七日まで行われている。この法会は五月、九月にも同様に行われた。

この護摩供は密教の代表的行事で、天台宗では採燈護摩と呼ばれ、野外に護摩壇を設け護摩木を燃やし護摩行を行うもので、この行は七日間続けられた。

一月二〇日には大般若教転読が実施された。大乘仏教の中心経典である玄奘訳の「大般若波羅蜜多經」は六百巻あり、これを短時間に唱えるため経題のみを速読する法要である。

ここで異様な光景が現出した。鰐淵寺僧侶が神官たちを後ろに従え、神殿に向かって大声で読経を唱えた。その間神官はただうつぶいっている外なかった。

さらに念が入ったことに隣接する国造家に赴き、一九日には千家宅、翌日には北嶋宅にて各々密教の修法である行法を行った。

また唐から持ち込まれた陰陽五行説を由来とする仏教色の濃い五節句が取り込まれる。

一月七日人立・三月三日三月会(上巳)・五月五日五霊会(御霊会とも端午)・七月七日七夕・九月九日九月会(重陽)である。

もつとも重要な祭祀とされた三月会については、寺・社双方の内部文書からその重要性和細部の状況が窺える。

三月会を取り仕切る五頭役のうち、鰐淵寺僧侶が二頭役を務め、大社神官・国内御家人を差配した。大社両国造家は各々担当を細かく決め分担して奉仕した。上巳は農作業の開始を意味した農事暦でもあった。一宮最大の祭祀であったが、大般若教転読や大乘五部の論談が行われ、ここでも鰐淵寺僧侶が中心の役割を果たし、神官はその補助役に甘んじた。

神仏分離した後十八世紀にも経緯は不明ながら、千家家東上官の三男が鰐淵寺和多坊の住職法師になっており、習合時代の影響を長く残していたことがわかる。

これら仏教的行事は当時の行事六十三あるうち十を数え、二割近くを占めた。無論神仏分離した寛文七年(二六六七)の造営からは、すべて年間行事からは排除された。

わが国最初の神仏分離を果たした出雲大社と鰐淵寺は、明治維新時の廃仏稀釈運動の荒波にはもはや襲われなかった。

平成二十四年九月出雲大社を参拝後、鰐淵寺に行くため、一畑電鉄に乗り雲州平田駅に降りた。大社を出るときは晴れていたが、土砂降りの雨に覆われた。日本海特有の天候変化に驚いたが、路線バスは時刻表通りに来た。大雨の中一時間一本のバスに乗り鰐淵寺へ向かった。寺の駐車場前で降りるとあれほどの豪雨がびたりと止み、緑が色鮮やかさを増して迎えてくれた。

小川と参道が並行し、坂を上ると山門があり、橋を渡り入山した。もみじの太木に囲まれた百八つの石段を上ると天台宗特有の根本堂があり、本尊の薬師如来と先手観音が祀られていた。

拝観後、入口で受付をしていた中年僧侶に「鰐淵寺は嘗て出雲大社の別当寺だったのですね。なぜ辞めたのですか」と尋ねた。「向こうから申し出たので、辞めただけよ」と、不満顔でそっけなく答えた。

当時の「無念な心境」を表しているな、と思いつながら帰山した。

## 参考文献

- 『出雲鰐淵寺文書』 同研究会 法蔵館  
『出雲国造家文書』 村田正志校注

## 河井継之助と小林虎三郎

新井 宏

終戦の年の昭和二十年春、小学生二年生になる時、新潟県長岡市の南方にある古志郡に疎開した。母方の里に一年間、父方の里に三年間、合計四年間を過ぎた思い出の地である。

『まんじ』に疎開の頃のことを何か書こうと思いついた。そのために、久しく訪れていない郷里に行ってみよう。

しかし、わずか一、二日の日程が取れない。軽い病状ではあるが、若干介護を必要とする妻を半日以上置いて出掛ける気になれないのである。

そこで、二つの方法を考えた。ひとつは郷里の郷土史の本を徹底して集めてみることに、もうひとつはグーグルのストリート・ビューで思い出の地を紀行してみることである。

まず、旧古志郡の内、長岡市に編入された地域の郷土史、六百頁ほどの『岡南』を入手した。そこには四つの小学校の歴史が詳しく書かれているが、母方の里の高島小学校も父方の里の十日町小学校もその中にある。絶好な資料である。

ストリート・ビューの利用方法については、かなり手慣れている。それは海外旅行などで訪れた観光地などを再訪するのにもって

こいだからである。徒歩の感覚、自転車の感覚、車の感覚で路を進みながら、立ち止まっては四方を見渡す。時には観光名所の内部までサーブスしてくれる。

疎開した地域は、元々は小千谷市と長岡市の中間地、戊辰戦争(北越戦争)の主舞台である。小学校四年生の時には、最初の激戦地、榎木峠まで遠足に行ったこともある。

戦争の経過については司馬遼太郎の『峠』に詳しい。大政奉還後も徳川家を支持する長岡藩主・牧野忠訓は百二十石の河井継之助を藩政の中心(家老上席・軍事総裁)に据えて、江戸屋敷を処分した資金で最新兵器のガトリング砲(機関銃)やエンフィールド銃、スナイドル銃を購入、強力な装備のもとで、武力中立を唱える。

しかし長岡藩では、世襲家老や上級家臣の多くは恭順・非戦を主張していた。これを藩主の意向とは云え、武力で制圧したのであるから、中立を唱えても新政府への武力抵抗を前提としていたと見られても当然である。

小千谷の慈眼寺で、河井継之助は新政府軍監・土佐藩の岩村精一郎との会談に臨む。十二歳の岩村では「会津藩を説得する」と説く河井継之助を受け止める権限も器量もなく追い返してしまった。上位の軍監、長州の山県(有朋)や薩摩の黒田(清隆)に会えなかったのが不幸であった。

司馬遼太郎の『峠』には記載がないが、その翌日、尾州藩の軍監が河井継之助に接触しようとする動きもあったと地史は伝える。しかし河井は「薩長の徒は暴慢をきわめ、わが微衷はさらに顧みられず、事ここにいたれば……」と突き進んでしまった。

『峠』や判官贔屓もあってか、河井継之助の人氣は極めてたかい。当時の最高級の人材であったことは間違いないであろう。しかし地元での評価は極めて厳しかった。意味のない戦争を引き起こし、地域を焦土にした非情の人物として怨嗟の的となったとも伝えられている。継之助の妻すがは石も追われ北海道に住み故郷の長岡には一生戻れなかった。

事実、私の疎開先の十日町村でも、半数の民家や三つの寺院が焼かれている。

北越戦争敗戦後、意外なことに長岡藩は完全な取りつぶしを免れ、二万四千石を受ける。その時、長岡藩大参事として藩政を担ったのが、昌平齋で河井継之助と共に学んだ恭順派の小林虎三郎である。

山本有三の戯曲「米百俵」で世に知られるように、厳しい窮乏の中にあつた長岡藩に、救援のための米百俵が届けられたが、虎三郎は困窮する家臣の救済には遣わず、国漢学校の設立資金に使った。河井継之助と小林虎三郎、いつの世も正義と正義の対立が悲劇を生むと云っては怒られるであろうか。